

タイでプラスチック問題への対応が加速

◆タイ地場と欧米大手のプラスチック・リサイクル事業が相次ぐ

タイのPTTグローバル・ケミカル（PTTGC）とオーストリアの容器包装大手アルプラは2019年9月、タイ東部でプラスチック・リサイクル会社を設立した。計画では、ポリエチレンテレフタレート（PET）や高密度ポリエチレン（HDPE）の高品質な再生品を生産する。アルプラは容器包装で世界46カ国に拠点をもち、最近では欧州やメキシコでリサイクル事業も展開している。同じく9月、タイのサイアム・セメントと米ダウも、プラスチック・リサイクル事業で覚書を締結した。廃プラをペレットなどにするマテリアルリサイクルのほか、油化・ガス化したり、解重合によりモノマー化するケミカルリサイクルの可能性も検討する。

タイでは4月にプラスチックごみ削減に向けたロードマップが策定されている。22年にプラスチック製レジ袋を全廃するほか、27年にはプラスチック廃棄物を100%、リユースまたはリサイクルする目標を掲げている。フランスの廃棄物処理大手スエズもタイで、低密度ポリエチレン（LDPE）やリニアポリエチレン（LLDPE）フィルムのリサイクル工場を20年に建設する。海洋プラスチックごみ排出で世界6位と目されるタイで、プラスチック・リサイクルの動きが加速している。

◆サトウキビやキャッサバの世界的産地で、バイオプラスチックにも注目

フランスの石油・ガス大手トタルとオランダの乳酸製造大手コービオンの合弁トタルコービオンPLAは9月、タイでバイオプラスチック・ポリ乳酸（PLA）の生産を開始した。世界2位の年産7.5万トン規模で、サトウキビを原料とする。

サトウキビやキャッサバなどのバイオマス資源が豊富なタイは、バイオプラスチックでも注目されている。17年設立のタイのスタートアップ企業バイオ・エコは、これら植物由来の生分解性プラスチック容器・包装製品を生産している。

日系企業もタイでは、三菱ケミカルがPTTGCと合弁でバイオPBS（ポリブチレンサクシネート）を生産しているほか、東レや三井製糖がサトウキビ搾りかすからエタノール原料やポリフェノール、オリゴ糖などの高付加価値品を製造する実証事業に取り組んでいる。

【長谷川雅史】